第１回先進地視察研修報告

１　視察概要

期　日	令和３年４月 21 日（水）午後１時 30 分～
視察先	姫路市立豊富小中学校（義務教育学校） （姫路市立豊富小学校と姫路市立豊富中学校が施設一体型義務教育学校に）
所在地	前期課程：姫路市豊富町後蔭 925 番地　後期課程：姫路市豊富町後蔭 944 番地
参加者	検討会議委員　３名、市教委推進室職員　３名　計６名
児童・生徒数	全校生 732 名（前期課程 458 名　後期課程 264 名） １年(56) ２年(81) ３年(62) ４年(85) ５年(81) ６年(103) ７年(86) ８年(90) ９年(88)
学級数	１年(2)　２年(3)　３年(2)　４年(3)　５年(3)　６年(3)　７年(3)　８年(3)　９年(3)

２　提供資料　　義務教育学校　姫路市立豊富小中学校　開校要覧（別添）

３　教育グランドデザイン（全体像）

1	めざす学校像	あいさつと笑顔あふれる地域の学校
2	学校教育目標	変動する社会の中で自己を実現できる人材の育成
3	育みたい資質・能力	未来を拓く道具となる『課題対応能力』
4	課題対応能力を育む３つの力	前に踏み出す力・調べる力・チームで取り組む力
5	めざす子ども像	豊かな感性を持ち、知恵を活かして課題や場面に対応できる子
6	学びに向かう力	試す、確かめる、まとめる、テーマにせまる、場数をふむ、行動に活かす （た）　（ま）　（て）　（ば）　（こ）
7	学びへの支援	体験・学び方・テクノロジー・場の設定・好奇心
8	ブランドカリキュラム	●情報活用能力の育成（図書・新聞・ＩＣＴ(タブレット)活用 ●豊かな体験活動の推進（とよとみ体験プラン） ●学校図書館の機能向上（読書センター・学習情報センター） ●とよとみ学校応援団（学びのパートナー・くらしのサポーター） ●ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の推進 ●特別支援教育の推進 ●道徳・人権教育の推進 ●健康サイクルとよとみ（運動・食事・睡眠） ●ＮＩＥ（新聞を活用した教育）推進 ●防災教育の推進

４　参加委員アンケート回答より

No	質　問　内　容	回　答
Q1	「学びの系統性・指導の一貫性・育ちの連続性」を重視する小中一貫教育について興味関心が持てたか。	①持てた　**（３）** ②どちらかと言えば持てた ③あまり持てなかった ④持てなかった
Q2	小中一貫教育を推進する一つの形として、義務教育学校という制度について理解できましたか。	①できた　**（２）** ②ある程度できた　**（１）**

		③あまりできなかった ④できなかった
Q3	近隣市においても導入が拡大している「小中一貫教育」は、これからの学校における教育システムとしてどう感じられましたか。	①大いに期待できる　（１） ②どちらかといえば期待できる　（１） ③あまり期待できない ④期待できない ⑤わからない　（１）
Q4	姫路市立豊富小中学校の学校運営・教育活動について、関心を持たれた取組や教育活動は。	①あった　（３） ②無かった
Q5	関心を持たれた取組や教育活動の具体例 ○社会の大きな変容を見据えた、「蔭山の里学院」グランドゼザイン ○小学校・中学校から、前期課程・後期課程という名称変更による意識変革 ○義務教育学校児童生徒の学びの共同活動と適切で節度ある生活ぶり ○前期・後期課程の教職員が、良好な職員室文化を構築している実態（新たな視点） ○タブレット・ＩＣＴ機器を当たり前のように活用した授業 ○めあて　ふりかえりシート（タブレットによるデータ管理） ○新聞を活用した教育（ＮＩＥ） ○めざす学校像の具現化ができていた。しっかりした挨拶 ○一体型校舎であるため、子どもや教員の教室移動や交流がスムーズ ○ハード面でのメリットを活かしている ○タブレット端末の利用は慣れた様子（小学校低学年でも活用） ○高学年では、レポート作成・課題提出等にもタブレット活用 ○タブレットが文房具の１つとして定着。授業中の利用もメリハリ ○タブレットを活用し、全員参加型の授業を展開（掲示板への書き込みによる参加） ○前期・後期課程合同の職員室設置（円滑なコミュニケーションに繋がる） ○教職員が、タブレット端末を校務に積極的活用（ペーパーレス・意見交流等） ○教科担任制に対する現場の期待・ニーズは大きい ○小中一貫校に関する丁寧な保護者説明が実施	
Q6	先進地視察を通して持たれた意見・感想　等	

学校要覧	その学校の教育がめざすゴールが全て凝縮されている。
学校・家庭・地域	３者の役割分担が相乗効果を生んでいる。子どもたちを社会全体で支える意識が醸成されている。
生活態度	挨拶の習慣が身についている。施設が新しいということではなく、清掃が行き届き清潔である。丁寧に校舎が使われている。
適切な学習規模	学年複数学級（できるなら３学級以上）この規模なら学びが厚い。 多様な意見との触れ合い（学びの交換）が大切
基礎学力の向上	前期課程（楽しい学習）から後期課程（定着学習）への移行が重要 学びに向かう環境が整っている。
教科担任制	５・６年生に完全導入。教師の得意教科を活かす。
ＩＣＴ活用 タブレット活用	戦機課程児童のタイピングの速さ、慣れが際立っていた。 授業中にタブレットを使用することが当たり前になっている。 低学年から、段階的に機器の治術を修得するカリキュラムがある。 先生方がどの場面でＩＴ技術を使えば効果的かの研究を十分されている。 基礎的なＩＴスキルの高さに驚いた。
義務教育学校	管理職１名という、意思決定の速さはメリット。子どもについての情報交換は活発。業務の効率化が進んでいる。（ペーパーレス・データベース化等）

感想	この環境で過ごした子どもと、従来の学習環境で過ごした子どもは、９年間で相当な力の差がでると感じた。 先生方が、10 歩ほど先の未来を見据え、授業を工夫し取り組まれている。
感想	変化する社会に対応できる人材の育成には何が必要なのかとの議論を尽くされて、学校として目指すべき方向を、学校・家庭・地域で共有されている。
感想	最終的なゴールに向かうため、それぞれの立場で考え協力されている姿が印象に残った。
感想	全体を通して非常に有意義な視察であった。
感想	小中一貫教育（義務教育学校）の良い面に触れることができた。引き続き、小中一貫教育について検討していきたい。
小中一貫教育に関する研究・検証	調査検証したい事柄 ・小中一貫教育導入及び、義務教育学校による推進のメリット ・教科担任制により教師・子ども双方が得られる成果 ・小中一貫教育が先生方の意識改革・アクティブラーニング推進に与える効果 ・７年～９年生に関し、小中一貫教育導入が与えるメリット・デメリット ・小規模校における小中一貫教育導入の効果 ・小中一貫校導入に起因する事柄の理解 （変わること・変わらないこと、長所・短所　等） 課題 ・小中一貫教育制度そのものの理解を深める研修 ・ＧＩＧＡスクール、タブレット学習等も実際に見ると利点が理解可能 ・一体型・併設型・分離型の小中一貫校や義務教育学校のメリットやデメリットについて再確認必要 ・学校園の保護者の議論参加を促すことが必要 （制度を理解した上で、本市の学校の将来像を決めることが大切） ・保護者を含めた地域との合意形成が必要 （学校園保護者と地域の意見に、差が生じることにも危惧される） ・意思決定の方法について　　等
感想	一貫教育により、学習面のつまづき、生活面のトラブル等を軽減することが期待できる。
感想	幅広い異年齢での関わりが増え、精神的な成長に繋がることが期待できる。
感想	前期・後期課程の教職員同士の連携が図りやすい。教職員の負担軽減にも効果がある。
感想	前期課程担当教員が、義務教育終了時の生徒たちのゴールを具体的にイメージできる。
感想	視察校は、良好な条件の下で義務教育学校に移行できた例である。本市で同様の成果が得られる保証は無い。また、いわゆる中１ギャップの問題が、高１ギャップへと先送りされ、より深刻化されるとの報告があることも認識すべきである。